

エヴァンゲリオン～チート逆行者の力～

如月 霊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

赤い世界で別世界の神様（碓シンジ）に合ったシンジは別世界の力を与えられて逆行。シンジはどうやって世界を導くのか。

下手なのは勘弁を！

目次

原作前

プロローグ

第一話

第二話

第三話

原作開始

使徒襲来

その1

使徒襲来

その2

使徒襲来

その3

見知らぬ天井

その1

知らない天井

その2

第壱中学校

第四使徒襲来

その1

第四使徒襲来

その2

アスカ来日

その1

アスカ来日

その2

アスカ来日

その3

アスカ来日

その4

アスカ来る！第壱中へ

エヴァ四号機、消滅せず

第二支部、ラミエル来る

狙撃せよ、シンジ

心の底

双子の使徒、来る

1

5

8

10

13

17

21

23

26

32

35

38

41

44

46

48

51

54

58

60

64

67

原作前
プロローグ

赤い

紅い

アカイ

全てが真っ赤に染まった世界に一人の少年がいた。少年の名前は
☒☒碓シンジ。運命を操作された少年だ。

「アスカもいなくなつた……僕は……全部父さんがいけないんだ
！僕を利用して……戻りたいな……あの頃に……みんながいて楽
しかつた時代に……」

シンジが悲しそうに声を出した。すると後ろから声がした。振り
替えると仮面を着けた一人の少年がいた。

「ならばその願い、叶えよう」

「えっ？君は……いったい」

「僕は神様だよ、君達で言うところのね。碓シンジ君は元の世界に戻
りたいかい？」

「ああ！もちろんさ！アスカがいて、綾波も、トウジも、ケンスケもみ
んながいる世界がいい！」

「ならば君に力を与えよう……他の世界の力をね？」

神様はそう言いシンジの頭に手をかざして力の使う知識とシンジ
の世界の事実の知識を与えた。シンジに与えられた力は

- 1、能力を創り出す能力
- 2、身体能力を最強にして空間認識能力を付ける
- 3、スーパーコーデイネーターの頭脳
- 4、ガンダムシリーズ全ての機体の知識
- 5、他のアニメや現実の機械関係者の全知識
- 6、純粹種イノベーターの能力
- 7、ヴェーダの使用権限
- 8、ヴェーダを存在させる
- 9、無限の資財と資金
- 10、ニュータイプにする
- 11、使徒全ての力
- 12、蒼き鋼のアルペジオの全ての力
- 13、ATフィールドを使える

この13個の力だった。これの情報を受け取ったシンジは情報量の多さから頭を押さえながらも弱々しく声を出した。

「神様……これは……いったい……」

「ああ、これは別の世界のアニメの力だよ」

「他の世界の……アニメ？」

「そうだ、他の世界のアニメだ」

「なるほどね……それじゃあ……お願い……します」

「それじゃあ君が君の父に捨てられた時に逆行させるね♪頑張って幸せになってね♪行ってらっしやい♪」

神様がそう言うと言うとシンジは赤い世界から消えた。

くくシンジが居なくなった後くく

シンジという世界の崩壊を止めていた留め具がなくなった赤い世界は崩壊を始め、ものの十分で塵となり消えていった。その消える様子を神様は自分の世界で見ている。その世界で神様は仮面を外していた。神様の顔は碓シンジにそっくりになっていた。そう、神様の正体は平行世界で神になった碓シンジだったのだ。

「さて、僕はどうやって世界を導くのかなく」

と神様は崩壊した世界を見ながらポツリと呟いた。そして

「楽しませてもらいますかね…」

と一人でニヤリと一人でコーヒーを片手に笑っていた。

第一話

く 駅のホームく

プシュー

電車の扉が閉まる音が耳に入り、意識が覚醒する。直ぐ様自身の体を小さな手でペタペタと触り自分が九才の頃の体になってゲンドウに捨てられた時に戻ってきた事を確認する。

(戻ってきた、か)

かつて自身が先生と呼んだ育ての親の顔が目には浮かび顔を強く左右に振りその顔を忘れようとした。その最中に駅のホームに掲示されていた戦略自衛隊のポスターが目に入った。

「…戦自に行くべきかな…」

そう呟きシンジは駅を後にし、駅から数百メートル先の基地に向かった。

く 戦略自衛隊基地く

「ん？君、どうしたんだい？お父さんかお母さんは？」

基地の門前に立っていた警備の兵士は幼いシンジにそう聞いた。

「お母さんが居なくなっちゃって高瀬仁って人を頼れって…」

そう言いそれっぽいメモ書き(便利だよねく偽装できるよ) 警備

の兵士の人情を頼った。

拝啓、高瀬仁様

ゲヒルンでの実験で私が死ぬような事があつたらシンジを助けてやってください。

敬具 碓ユ

イ

「高瀬仁…高瀬司令!？」

そして警備の兵士は高瀬の名前を聞き焦りつつ門横の建物の中に走り受話器を掴んだ。

「た、高瀬司令!!」

『何かあつたのか?』

「はっ！司令。現在本基地前門にて碓ユイの息子とか言う人物が碓ユイからの高瀬司令宛の手紙を持って来ております…」

『ちよ、ちよと待て！碓ユイは私の知り合いだ！早く通せ!』

「り、了解しました!」

警備の兵士はシンジを基地の中に通し第二東京基地司令と書かれた看板が掛かった部屋に通された。

「…始めまして、だね。俺は君の母と学友の戦略自衛隊第二東京基地の司令をしている高瀬仁一将だよ。シンジ君はなんでこんなところに来たんだい?」

「母さんが死んで、父さんに捨てられたから。行き先がないんだ。母

さんから仁さんのことは聞いてたから。仁さん！僕を戦略自衛隊基地に置いてください！」

「ユイが死んだ!?それに父に捨てられたか…よし、わかった、君の面倒は俺が見よう。基地に居るといい…だけど食堂の当番はしてもらおうぞ?働かざる者食うべからずだからな！」

「ありがとう!仁さん！」

シンジはこうして戦略自衛隊基地で生活することになった。シンジはその話が終わると食堂に仁さんに連れられて行った。食堂につくと第二東京基地食堂の料理長がシンジに試験を出してきた。

「涼さん、いる〜?」

「いるよ。高瀬一将。その子は?」

「ああ、知り合いの子だよ。碇シンジ君っていうんだ。それで涼さん、お願いなんだけどシンジに厨房手伝わせてくれない?」

「なんででだい?厨房は料理人の聖地だよ!どうしてもってんならその子の料理の腕をみせてくれ!君、厨房の食材を使って何か作って見せな!」

「わかったよ!それじゃあ厨房借りるね」

シンジはその話が終わると厨房に入っていく三十分後になってようやく出てきた。シンジはその時にハンバーグを作って持ってきて料理長に出した。それを食べた料理長に

「…良いじゃないか。よし、シンジ君。君には此処の厨房手伝いをしてもらおう」

と好評価が与えられ、晴れてシンジは第二東京基地の料理長補佐になった。

第二話

ある日の夜の司令室

ある日、シンジは夜に高瀬司令を訪ねて司令室に行った。

「仁さん。これ見てください」

「ん？……!?こ、これはなんなんだい、シンジ君」

「これは僕の発明品ですよ。名前はモビルスーツ、通称MSです」

「こ、こんなものよく考え付くな」（やっぱりユイの息子だな）

「これ作る場所を貸してくれませんか？資金と資材はこっちで当てがありますから」

「あ、ああ、良いよ。けどMSが出来たら見せてくれよ？」

「はい」

シンジは司令室で毎日こつこつ書いていた設計図を見せて基地施設の許可を取った。そしてモビルスーツ制作の資金と資材はシンジ持ちだ。（仁さん名義で株投資で大成功した）そしてシンジのこの計画書を戦略自衛隊総司令部に提出した。するとシンジは正式に戦略自衛隊に三尉扱いで所属させよと辞令が降りてきてシンジは第二東京戦略自衛隊基地に三尉として所属することになった。

その後日からシンジは整備庫の一角を借りてモビルスーツを作り始めた。モビルスーツを作っている際に様々な基地の人達が

「手伝おうか？」などと聞いてくれたがシンジは体力的や危ない作業以外はそれを自分で作って見たいのでと断っていた。それから10ヶ月掛かってモビルスーツ第一号機「セイバーガンダム」が完成した。

くモビルスーツが完成した整備庫の一角く

整備庫の一角にはシンジと基地司令の高瀬仁一将、整備班班長のシャル・ティルス軍曹、副司令の時津川小春准将と戦略自衛隊総司令がいた。そしてシンジはそこで

「まず、僕が作った機動兵器モビルスーツ通称MSのテストを開始します。ちなみにこの機体の名前はセイバーガンダムです。それではテストを開始します」

と言いシンジはセイバーガンダムのテストをするためにセイバーガンダムのコックピットに入った。シンジがコックピットに入って電源をいれると目が光り、機体の色が変わった。

「な、色が変わった!」

「これは装甲の効力ですよ。そしてこの装甲はVPS装甲というもので実弾は今のこの機体には効きません」

シンジは説明し終わるとモビルスーツの足をがに股に開き地面を蹴りあげて飛び上がると変形をした。すると地面では騒いでる人がいた。

「な、変形しただと!」

そして基地を2、3回回ってからもう一度変形して着陸した。このテストによってモビルスーツは戦略自衛隊総司令に認められて量産型モビルスーツRGE—G2100「クランシェ」が戦略自衛隊の各基地に配備され始めた。それから数日後モビルスーツの説明会を開き戦略自衛隊、並びに国連軍の技術者達を驚かせた。そしてシンジはドイツの大学に通い半年後に博士号を取得して日本の第二東京戦略自衛隊基地に帰って来た。すると帰って来るなりシンジは司令室に呼び出された。

第三話

く第二東京戦略自衛隊基地司令室く

司令室に呼び出されたシンジは司令室に入ると敬礼をする。

「碓シンジ二佐、ただいま帰還しました」

「おかえり、碓二佐。取り合えず座りなさい」

高瀬一将はそう言うと言いつつシンジは敬礼をやめてソファアームに座った。すると高瀬一将から戦略自衛隊総司令部から降りてきた辞令を伝えられた。

「碓二佐、戦略自衛隊総司令部から辞令が降りてきた」

「いったいどんな辞令なんですか？」

「それは、碓二佐を本日付けで新しく作られる特務大隊隊長に任命する。＼だそうだ」

「はい。碓シンジ二佐、慎んで辞令をお受けします」

「ああ、頼んだよ。シンジ君。あと明日、戦略自衛隊総司令部に出頭してくれ」

「了解しました」

辞令を伝えられるとシンジは敬礼をして辞令を受け、司令室を後にした。

「次の日戦略自衛隊総司令部」

次の日シンジは戦略自衛隊総司令部にいた。そして司令室に入ると敬礼をした。

「碓シンジ二佐、第二東京戦略自衛隊基地より出頭いたしました」

「それでは辞令の細かい内容を伝える。隊の名称は第23特務隊ヴァールハイトだ。そして碓二佐を現時刻を持って特務一佐とし、第23特務隊ヴァールハイト隊長に任命する」

「総司令、一つお願いがあります」

「何かね？」

「第23特務隊ヴァールハイトに配備されるモバイルスーツと艦は此方で指定してもよろしいでしょうか」

「ああ、それくらいかまわん」

「はっ！失礼します！」

と言ってシンジは再び敬礼をし、司令室を後にした。

そのあとシンジは第23特務隊隊員を召集した。

「自分が第23特務隊ヴァールハイトの隊長に就任した碓一佐です。貴官等にはこれからもよりいっそうの努力と奮闘を期待する…以上だ」

「「「はっ！」」」

隊員達は全員が声を張り上げて返事をした。

「それではこれで解散とする」

この掛け声で隊員達は部屋に帰っていった。

その後日シンジは第23特務隊ヴァールハイトに納める戦艦「ミネルバ」にいた。ミネルバはガンダムSEEDdestinyに出てきたミネルバを改良してインパルスの格納部を無くしたため、搭載機が格段に増えていた。そしてシンジは隊の隊長と艦長を兼任することとなる。そしてその1年後に起きた戦略自衛隊総司令部の襲撃を第23特務隊ヴァールハイトがみごと撃退した。その事により第23特務隊の隊員全員が一階級昇格した。その後も任務を確実にこなしていた。それから1年後にシンジは退職した国連軍総司令部司令に国連軍首脳部が

『碓中将ならば問題なからう』

という判断が下され、国連軍総司令となり階級が大將元帥となった。しかしシンジは国連軍総司令という身に有りながら第23特務隊ヴァールハイトの隊長をしぶとく続けており、第23特務隊ヴァールハイトは今や総司令部直属の部隊となった。そして第23特務隊ヴァールハイトの隊長や、国連軍の総司令をしている事はネルフ、特にゼーレ側の国連議員には伏せてあり、情報は一切伝わってはいなかった。それからシンジは第二東京のアパートにネルフに見つけられるように住民登録をした。すると父からのあの手紙が届いた。

原作開始 使徒襲来 その1

シンジは前と同じように葛城ミサトが迎えに来ることになっていたがやはりまだ来ていなかった。それに対してシンジはヤレヤレと言った表情になっていた。

「やっぱりミサトさん遅いな〜」

（飲みすぎて寝坊でもしたかな？ハツハツハ）

まさにその通りであった。そして待ち合い時間を1時間過ぎた頃になると山の影からUN重戦闘機と共に黒い巨人が出てきた。

「……水を司る天使……サキエルか……」

シンジはそう呟いた。サキエルに国連軍は攻撃を仕掛け始めた。しかし全く利く様子はなく、サキエルはATフィールドで全ての攻撃を受けとめて国連軍に被害が出るのみだった。するとサキエルという目標を見失ったミサイルがシンジに向かって突っ込んできた。しかしそれをシンジはクラインフィールドを展開し防いだ。クラインフィールドに当たったミサイルは信管が起動して爆発した。その爆発の煙が消えるとアルピーヌ・ルノーが走ってきて運転手が扉を開けた。アルピーヌ・ルノーの運転手はシンジを一時間前に迎えに来るはずだった葛城ミサトだった。

「シンジ君！早く乗って！」

「了解！」

シンジが車に乗り込むとアルピーヌ・ルノーは急発進してサキエルから離れて行った。走っている車の窓からシンジはサキエルを見ていた。

「ごめんね、遅れちゃって」

「構いませんよ、葛城さん」

「ミサトでいいわよ。シンジ君……よね？」

なぜか疑問符が頭の上に浮かぶ。なぜならシンジはピンクのカッターシャツにスカートに白衣できわめつけは髪の色が明るい茶色で

碓ユイにそっくりなのだ。

「そんなことより。ミサトさん。それよりも国連軍機が撤退してきますよっ。」

「ヤバイ！N2地雷を使うわけ！」

「伏せて！」

ミサトはシンジに覆い被さって衝撃に備える姿勢を取った。しかしシンジがN2地雷が使われた瞬間にクラインフィールドを展開して衝撃を防いだためミサトのルノーには衝撃が来なかった。

「おつかしいわね、衝撃が無いなんて。まあいいわ！ブツ飛ばすわよ！」

ミサトはそう言うのと車をネルフ本部まで急がせた。

同時刻ネルフ発令所

「15年ぶりか」

ネルフ副司令冬月コウゾウが横で椅子に腰掛け机で手を組んでいる男に問いかけた。

「ああ…」

問いかけられた男はただ短く返事をする。この男はネルフ総司令でシンジの父の碓ゲンドウだ。今はネルフの発令所で国連軍の将官が国連の指揮を取っていた。

「全戦力を投入しろ！出し惜しみは無しだ！」

「なんとしても目標を潰せ!!」

そして国連軍の将官の一人が鉛筆を折った。

するとサキエルから国連軍機が離れだして次の瞬間サキエルが光に強大な包まれて発令所の映像が切れた。

「わははははー!」

「見たかね!! これが我々のNN地雷の威力だよ」

「これで君の新兵器の出番はもう2度とないというわけだ」

国連軍の将官達は声を揃えてネルフを見下し始めた。そしてネルフのオペレーターの日向マコト二尉が映像の復旧を始めた。

「電波障害のため目標確認まで今しばらくお待ち下さい」

「あの爆発だ、ケリはついてる!!」

国連軍の将官が自信満々に言った。するとレーダーの表示に急にエネルギー反応が出る。

「爆心地にエネルギー反応!!」

そして日向はすぐに報告した。その報告に国連軍の将官は驚きを隠せない。

「なんだと!!」

「映像、回復しました」

そこにはまだ存在し続けているサキエルが映っていた。

「我々の切り札が」

「町をひとつ犠牲にしたんだぞ!!」

「なんて奴だ! 化け物め!!」

すると国連軍の将官にシンジから電話が掛かってきてネルフに指揮権を渡すように伝えた。

「ーはっ、わかっております」

「はいっ——では失礼いたしますっ」

「……碓くん、総司令から通達だよ。今から本作戦の指揮権は君に移った。お手並みを拝見させてもらおう」

「しかし、我々国連軍の所有兵器が目標に対して無力だったことは認めよう……だが碓君!! 君なら勝てるのかね」

国連軍の将官の一人がゲンドウに聞く。ゲンドウはそれにサング

ラスに手を触れて

「ご心配なく、その為のネルフです」

と言った。そしてゲンドウは横にいた冬月に命令を出した。

「冬月、初号機を起動させる」

「しかしパイロットが居ないぞ」

「問題ない、予備が届く」

「(自分の息子を予備扱いとはな)」

そしてゲンドウと冬月は格納庫に向かった。

使徒襲来 その2

ゲンドウと冬月が格納庫に向かうちよつと前

ミサトとシンジ今専用のエレベーターで地下のネルフ本部に向かっていた。

「そういえばお父さんからIDもらってない?」

「ええ、たしかここに……あつた」

シンジは自分の鞆からIDを取り出してミサトに渡した。

するとミサトはシンジにへようこそネルフ江と書かれたパンフレットを渡して質問をした。それを見終わるとシンジはミサトに断つてネルフに来ている将官に連絡を入れた。

「ミサトさん、電話していいですか?」

「え、ええいいわよ」

「私です。今回ばかりは指揮権を移行しろ!通常兵器では目標には効かんと何度言ったらわかる!弾と違つて兵士は大切だぞ!兵士とて人!変わりは居ないと分からないんですか!」

そう電話に怒鳴り込んで電話を切つたシンジにミサトは質問をした。

「し、シンジ君?誰に怒鳴つてるの?」

「いえ、お気になさらず、ただ仕事の話ですので」

「そ、そう」

それを聞くなりミサトは苦笑いをした。そしてシンジに再び別の質問をする。

「お父さんの仕事って知ってる?」

「ええもちろん知ってますよ。使徒を倒すために作られた国連直属の非公開組織 特務機関ネルフの総司令で階級は二将ですよね」

「え、ええそうよ。そういえばシンジ君のその格好って何なの?」

(ちよつと知りすぎじゃない(汗))

「ただの趣味ですよ」

それからシンジとミサトは基地に入るまで声がお互いに飛ばな

かった。

ネルフ本部

ミサトとシンジは同じところを5度ほど回っていた。

「迷ったんですか？」

「あ、あはは。だいじょーぶ」

そう言っつてミサトは赤木リツコに連絡を入れた。すると数分後赤木リツコがその場にやって来た。

「葛城一尉！あなたいい加減道を覚えなさいよ」

「リツコ、ごめん」

とミサトは素直に謝る。それを見たりツコはシンジを見ると一人の名前を驚きながら呟いた。

「まったく……!?!…あなたはユイ……さん……」

「違いますよりツコさん。僕はシンジですよ？これは趣味です」

「え、ええごめんなさいね。それより着いてきてくれる？シンジ君」

「わかりましたよりツコさん」

そう言っつとシンジとミサトとリツコの三人は格納庫に向かった。格納庫に入ると真っ暗な暗闇に包まれていたがリツコが何処やらのレバーを下ろすと電気が付き、目の前にエヴァンゲリオン初号機が現れた。

「あら驚かないのね」

「驚きようがないですよ」

「ま、まあいいわ、これはネルフが作った汎用人型決戦兵器人造人間エヴァンゲリオン、その初号機よ」

「これが六分儀ゲンドウの仕事ですか」

と言うと上からゲンドウの声がした。

「そうだ。…ユ、ユイ!?なぜそこに居るのだ!」

「お久しぶりですね、六分儀ゲンドウさんと冬月先生」

「あの頃の様だな…」

冬月がそう呟いて少し上を見上げた。シンジが言ったことに疑問符が上がったゲンドウはシンジに問いかける。

「シンジ、今なんと言った」

「だから“六分儀ゲンドウ”さんだよ。あなたはもう僕の父ではないんですよ」

「な、なぜだ!」

「理由は裁判所の命令を三度も無視し続けたからですよどうですか? 簡単でしょう。で、何の用ですか?」

「ふ、出撃」

とゲンドウが短く言った。それを聞いたミサトはリツコにパイロットの事を聞く

「リツコ? レイはもう無理よ、誰が乗るの?」

「彼よ」

「マジなの? ……しかたがない。シンジ君、あなたが乗るのよ」

「仕方ないですね、乗りますよ。六分儀、エヴァに乗るが条件があるからな。後で伝える」

「わかった…」

この事によりシンジは条件付でエヴァに乗ることになった。そしてシンジはリツコに操縦の仕方を教えてもらうように頼んだ。

「赤木一尉、操縦のレクチャーを」

「え、ええこつちよ」

そのリツコに言われてシンジはエヴァの操縦の仕方を教わりエン

トリープラグに入って行った。

使徒襲来 その3

ネルフ本部

ネルフはエヴァンゲリオン初号機の起動シークエンスを準備していた。

(人類補完計画どうやって潰そうかな)

シンジはそういうことを考えながらエントリープラグの中にいた。すると伊吹マヤ二尉達オペレーターが発進シークエンスを開始し出した。

『冷却完了!! ケイジ内 すべてドッキング位置』

『パイロット……エントリープラグ内コックピット位置に着きました!』

『プラグ固定終了!!』

『第一次接続開始!!』

『エントリープラグ注水!』

エントリープラグの中にLCLが注水し始めると発令所のリツコから通信が入る。しかしシンジに焦りの様子はない。

『その液体はLCLと言って肺がLCLに満たされると直接酸素を取り込んでくれるわ』

『う〜んいいですね。血の味がして♪』

シンジの呟きに発令所が静まり返った。しかしすぐに

ハツ と元に戻り発進シークエンスを再開した。

『し、主電源接続、全回路動力伝達、起動スタート!!』

『神経接続異常なし、初期コンタクトすべて問題なし』

『双方向回線開きます!』

『シンクロ率、はっ、86.7%!』

双方向回線が開かれ、出てきたシンクロ率にとリツコは驚きの表情を出した。

『凄いわね、訓練なしに80%台なんて』

『エヴァンゲリオン発進準備!』

その掛け声で機体のロックが外されていく。しばらくすると完了

したと通信が入った。

「発進準備完了！」

「碇司令！構いませんね？」

「ああ、使徒を倒さぬ限り我々に未来はない」

ミサトは振り返りゲンドウに発進許可を取ると前を向きエヴァンゲリオン初号機を発進をさせた。そして地上に出るとサキエルから5 kmの距離に射出された。そしてシンジは辺りを見回してトウジの妹を探して発見するとミサトに通信を入れた。

(たしかトウジの妹はくと……いた！)

「葛城一尉！前方二時の方向300M先のビルの下に人が居ます！確保しましたからどこに向かえばいいですか？」

『なんですすって!!そこから後方100Mのビルの下の所に保安部を向かわせるわ!』

そう通信をいれてトウジの妹を保安部が居るところに運ぶとトウジの妹を保安部が保護して行った。それを確認するとサキエルはあと2 kmというところまで来ていた。そしてシンジはミサトに通信を入れて武器を聞き出して攻撃に入り素早くシンジはサキエルに接近してコアを一度強く殴ると空中高く蹴り上げた。

「テヤッ!!」

するとサキエルは空中で爆散し、消え伏せた。しかしエントリープラグの中でシンジはスーパーボールくらいの赤い玉を握っていた。それはサキエルのコアだった。シンジはそのコアを異空間にしまうと疲れ過ぎて意識を失った。

見知らぬ天井　　その1

シンジは目覚めると何処かの部屋のベットにいた。そして小さく眩いた。

「またこの天井…か…」

そのすぐ後にミサトが入ってきた。

「シンジ君、目覚めたのね。ここはネルフ本部の病棟よ」

「はい、六分儀に会えますか？それと着替えるのでちよつと外に出てください」

「？わかったわ。着替えたら呼んでくれる？そうしたら司令のところに行きましようか」

「はい」

シンジの返事を聞いたミサトは病室からでた。それを確認したシンジは近くにあった自身の鞆の鍵を開け、中から国連軍の軍服を出して着る。もちろん大將の階級章付のだ。着替え終わるとシンジはミサトを再び読んだ。

「ミサトさん、もういいですよ」

「わかったわ、それじゃあ……って！なんでシンジ君が国連軍の軍服着てるの!!しかも大將の!!」

シンジの軍服姿を見たミサトは驚きのあまりに叫んだ。シンジはそれに父の所で話すと言って切り上げさせて父の所に向かった。

「まあまあ、父の所で話しますよ」

「わ、わかったわ、それじゃあ行きましよう」

ネルフ司令室

ネルフ司令室前に来るとミサトは司令室の戸を軽く叩き、入室の許可を取って司令室に入った。

「葛城ミサト一尉、サードチルドレンを連行して参りました」

「……入れ……」

「失礼します」

そして司令室に入るとゲンドウと冬月がいた。シンジが司令室に入るとゲンドウは声を出して質問した。

「……シンジ、なぜ国連軍の軍服を着ている」

「それは簡単なことだよ六分儀、僕が国連軍に属しているからだよ」

質問されたことに対するシンジの答えに司令室にいた冬月、ミサト、ゲンドウは固まってしまった。なぜなら反ネルフ組織の長がシンジだったからだ。そしてその沈黙を破ったのは冬月だった。

「碓大将、エヴァンゲリオンに乗る条件とはなんなんですか？」

「条件は全部で8個あります。」

一つ目はネルフでチルドレンにはならない。つまりは国連軍からの協力派遣員みたいにするのだね。ついでに僕の副官も居るからね？

二つ目は六分儀の僕の親権の破棄

三つ目は命令の絶対拒否権

四つ目は使徒戦による損害を僕らに請求しないこと……まあ、結局は国連に請求が来るんだけど……

五つ目は六分儀が使い込んだ碓家の資金を全額返却してもらおう

かな？

六つ目は監視や尋問、検査をしないことだね。これを見つけたらコロシテアゲルカラ：

七つ目は使徒戦に置いての報酬だね。使徒戦一回につき1000万円、実験一回につき2000万円で

八つ目は僕の妹？になるのかな、綾波レイの親権引き渡したよ。これはネルフから告発があつてね。裁判所と国連議会から僕の二の舞になる可能性があるとして辞令も降りてるし。僕がエヴァに乗っても乗らなくても拒否はできないよ。」

「ぐっ……わかった」

シンジの出した条件をゲンドウは引き受ける以外他ならず渋々了承した。返事を聞いたシンジは後日詳細な書類を渡すと言い放心状態だったミサトを連れて司令室を出た。

知らない天井 その2

司令室を出たシンジはミサトにある質問をした。

「ミサトさん？」

「は、はい！なんでしょうか！」

「普通でいいですよ？それよりもレイと使徒戦の時の女の子の病室ってどこですか？」

「わ、わかったわ。レイは201室で使徒戦の時の女の子は鈴原サクラと言って356室に居るわ。…会いに行くの？」

「ええ、その前に発令所の人たちに挨拶をしようかと思いましたが」

そうしてシンジとミサトは発令所に向かった。発令所に入るなり発令所要員全員が固まったがシンジが普通で。と言ったため普通に自己紹介をした。

「僕は国連軍総司令兼国連軍総司令部所属、第23特務隊ヴァールハイト隊長を勤めている碓シンジ大将です。国連軍から「協力者」としてエヴァンゲリオン初号機のパイロットをすることになったからよろしくお願いします。…あ、あと重要な時以外は堅苦しいのは無しでシンジでお願いします。」

「わ、私は技術部所属の伊吹マヤ二尉です。よろしくね、シンジ君」

「僕は第一作戦部所属の日向マコト二尉です。よろしく。」

「青葉シゲル二尉だよ、これからよろしくシンジ君」

自己紹介が終わるとシンジは何処かに電話をして迎えを呼んでミサトに地上に連れて行ってもらうように頼み地上に向かった。

「ミサトさん、迎えが来ますから地上に連れて行ってもらえますか？」

あと国連軍機が一機自動飛行で来ますから気にしないでくださいね」

「わ、わかったわ。着いてきて」

数十分後地上に居るとシンジの専用機「セイバーガンダム MkⅡ」が飛行変形してやって来て人型に変形してシンジの目の前に降り立った。

「こ、これは?!」

「これは僕の専用機 ZGMF-X23SⅡ「セイバーガンダム MkⅡ」ですよミサトさん。それじゃあ僕はレイと鈴原サクラちゃんのお見舞いしてから一旦基地に戻って用意を持って来ますよ。自分で用意した家に帰ります。あ、そうそう、僕の家はミサトさんの家の横の部屋なんでよろしくお願いしますね」

「ええ、よろしくね。シンジ君」

ミサトに近所の挨拶を済ますとシンジは「セイバーガンダム MkⅡ」に乗り込みレイとサクラのお見舞いに向かった。

サクラの病室

シンジはサクラの病室に入ると笑顔で自分がエヴァンゲリオンのパイロットだったことを教えた。

「やあ、鈴原サクラちゃん。怪我は大丈夫かい？」細く微笑む

(バカ兄貴見たいじゃなくてカッコいい人だな)

「は、はい。所で貴方は？」

「僕はシンジと言って君を助けたロボットのパイロットだよ」

「あ、ありがとうございます！」

「うん♪どういたしまして♪あ、そうだ、怪我した所見せてみて、治してあげるよ」(満面の笑み)

(な、なんて可愛い笑顔なの！バカ兄貴とは違うわ！)

そう言ってサクラはシンジに怪我した所を見せた。サクラは逃げる途中で階段を踏み外して落ちたため足と腕を骨折していたのだった。シンジはそれを治癒能力で治した。それを見たサクラは驚きで一杯だった。

「はい、治ったよ」

「はえ?!あ、ほんとだありがとうございます！けどどうやって治したんですか?」

「僕の能力という奴かな?なぜか最近出てきてね。便利でしょ」

それからしばらくサクラと話したシンジはレイのお見舞いをするためにレイの病室に向かう用意を始めた。

「そろそろ僕は行くよ」

「また、会えますかね?」

「わからないがまた会ったら話をしようね♪」

(その笑顔は反則やでく／＼／＼)

「は、はい!また!」

そう言ってシンジはサクラの病室を後にした。

レイの病室

レイの病室に入るとレイはシンジに質問をした。

「……誰?」

「僕は碇シンジ、君のお兄ちゃんだよ」

「私に兄なんて居ないわ…私は人形だから…」

「レイは人形なんかじゃない!!!」

シンジはレイの人形という言葉に反応してシンジはレイを抱き締めて否定をした。

「レイは人間だよ！誰が何と言おうともレイは僕の妹だ！」

(なに…この感情は…暖かい…)

そしてシンジがレイを放そうするとレイが引き留めた。

「もうすこしこのままがいい」

「わかったよ」

〜そして13分後〜

「ありがとうお兄ちゃん（／＼／＼）」

「レイ、僕らと一緒にミサトさんのところで暮らさない？」

シンジはレイと一緒に暮らすか質問した。それに対してレイは嬉しそうに返事をした。

「うん！お兄ちゃんと一緒に良い！」

「じゃあ一緒に来てくれ」

「うん！」

そう言うときシンジはレイを連れてセイバーに乗り込み副官を迎えに行った。

そしてシンジは戦略自衛隊時代からの副官の霧島マナ一佐とレイを連れて部屋に帰った。そして部屋に入るとシンジはサキエルのコアを取り出した。するとコアは光を放ち収まるとそこには14才くらいの一人の女の子がいた。その女の子はサキエルが人になった姿だった。そしてシンジがヴェーダを駆使して碇サキという戸籍を偽造して娘とした。それから四人はご飯を食べると明日に備えて眠むった。

ゼーレ

ゲンドウはゼーレの定例会議に来ていた。そして議長のキール・ローレンツから驚きの言葉を受けた。

「碇…いや六分儀君、ゼーレは人類補完計画を放棄することに決まっ

た」

「な、なぜですか！」

「人類補完計画はサードインパクトを起こして人類を一つに補完するというものだ。だが、死海文書の最後のページが解読されたのだ。そこには人類補完計画を実行すると人類が全滅するとな、それが理由だ」

「左様、人類を補完する。それこそが人類補完計画なのだ。全滅してはもともともない」

「しかし使徒は倒さねばならん、予算については一考しよう」

「わ、わかりました。」

「二」「人類の未来の為に」「」

ゲンドウが了承した事によりゼーレの会議は終了した。

そして死海文書の最後のページはシンジが解読をしてゼーレに送りつけたものだった。

第壱中学校

翌朝シンジ達は四人で食卓を囲んでいた。

「…おいしい」

「そうよね〜シンジはやっぱり料理うまいよね〜」

「さすがだね♪お父さん♪」

そこでシンジの料理を食べたレイ、マナ、サキは次々にシンジの料理に好評を出した。そして朝食を食べ終わるとシンジとレイとマナは中学校に向かいサキは国連軍基地開発部に向かった。

〈第壱中学校〉

第壱中学校に着くとシンジはレイに先に教室に行くように伝えた。

「レイ、先に教室に行つといてくれないか？僕とマナは先に職員室に向かわなきゃいけないから」

「うん、先に行つてるね♪」

そう言うとシンジとマナは職員室に向い、レイは教室に向かった。

シンジが正直に返信すると教室が揺れた。そしてその放課後トウジはケンスケとシンジを学校の屋上に連れて行った。そこでトウジはシンジに妹を助けたことについて礼を言った。

「妹を助けてくれてホンマありがとう！」

「トウジ、僕の友達になってくれない？」

「ああ、もちろんや！センセと呼ばせてくれ！」

「う、うんいいよ。よろしくね。」

「ケンスケも友達になつてくれない？」

「よろしくね碇」

その出来事から一週間後の同時刻の授業中に緊急の警報が発令された

第四使徒襲来 その1

シンジは第壱中学校に転校してから数日たつとクラスの人気者になった。ある日の体育のサッカーの時に司令塔として活躍し、イナズマイレブンの技を打ち込んだからだった。

そしてシンジが転校してきてから一週間後の授業中にマナの携帯が鳴った。

「シンジ！レイ！目標が接近中らしいわ！」

「了解！」

「わかったわ」

そう言うときシンジ、レイはネルフに向かい、マナはシンジに言われた通りに基地に向かった。

ネルフ発令所

シンジはネルフに着くとプラグスーツに着替えエヴァンゲリオンに乗り込んでいた。そこにミサトから通信が入った。

『シンジ君、発進準備いいかしら？』

「葛城一尉、使用可能武器は何が有りますか？」

『使用武器？使用可能はプログレッシブナイフとパレットライフルよ』

「わかりました。それと発進準備は出来ました」

『了解よ。エヴァ初号機、発進！』

そう言うのと通信が切れとエヴァンゲリオン初号機が発進された。

「シヤムシヤエル…君に恨みは無いが…！」

初号機はシヤムシヤエルに向かってパレットライフルを撃つ。パレットライフルの弾はシヤムシヤエルに向かって発射された。すると煙が立ちシヤムシヤエルが見えなくなった。

「なっ！！」

「うわあ〜！！」

煙が立つてすぐに煙の中からシヤムシヤエルのムチが急に出現し初号機の腕を掴むと後ろにあった山に叩きつけられた。すぐにシンジは山を見回しトウジとケンスケを探した。そしてトウジとケンスケは初号機が手をついた所のちかくに居た。

（この山は！！トウジとケンスケはどこにいる！）

「見つけた！」

トウジとケンスケを見つけたシンジはシヤムシヤエルを蹴り遠くに飛ばすとマナに通信をいれてトウジとケンスケをモバイルスーツで助けるように伝えた。マナは使徒戦が行われている所の上空にミラージュコロイドを展開していた国連軍第23特務隊ヴァールハイト旗艦「ミネルバ」で待機していたのだ。

「マナ…その山にトウジとケンスケが居るからモバイルスーツで助けてミネルバに運んで離脱しろ！」

「合点承知！」

「トウジ！ケンスケ！さっさと乗れ！」

「霧島？」

「霧島か！助かった！」

そう言うのとトウジとケンスケはマナのセイバーに乗り込みミネルバに帰還するとミネルバは戦域から離脱した。離脱したのを確認するとミサトから通信が入った。

『シンジ君！何かってなことしてるの！』

「人命救助は我々国連軍の仕事だ！」

しかしシンジはミサトに怒鳴り通信を切った。するとシンジは機体进行操作しGガンダムのドモンの格好を取った。

第四使徒襲来 その2

シンジは流派東方不敗の最終奥義の構えを取り技を繰り出した。

「さてと、やりますか！」

「俺のこの手が真つ赤に燃える！」

「勝利を掴めとオオ！」

「轟き叫ぶウウウ！」

「爆熱！ゴツドフィンガアア〜！！！！」

「東方不敗最終奥義！石破天驚拳〜！」

そしてシャムシャエルに向かって技を打ち込んだ。シャムシャエルはATフィールドを張ったがそれを容易に突き破りコアを直撃してシャムシャエルは倒された。それから直ぐにリツコから通信が入った。

『い、碓大将！今のはいったい！』

「…今のはある流派の技ですよ。エヴァンゲリオンは想像で動くものだから実際にできる技を想像して使っただけですよ」

『そんな……それに実際に出来るって……』

そしてリツコの落胆した声が聞こえてきた。それを無視して日向二尉が撤退の指示を出した。

『シンジ君、撤退はルートA―340にお願い』

「了解した」

そう言うとシンジは通信を切りルートA―340からネルフ本部に撤退をした。ネルフに着くとシンジはシャワーを浴び、服を国連軍大将の軍服に着替えると自動操縦で来た「セイバーガンダムMk―II」に乗り込みトウジ達がいる「ミネルバ」に向かった。

ミネルバ

ミネルバの一室にマナ、トウジ、ケンスケの三人が居た。

「なあ、霧島。わいらどうなるんやろか」

「あなた達二人の処分は国連軍総司令が直々に決められるらしいわ」

「そ、そんな〜」

マナの答えを聞いたケンスケは情けない声を上げた。

そしてしばらくすると三人がいる部屋の扉が開かれ、マナが敬礼をした。そこに入ってきた人物を見てトウジとケンスケは叫んだ。

「なんでセンセ（碓）が、ここにいるんだ（や）！」

「それじゃあ、改めて自己紹介をしますかね。僕は国連軍総司令兼第23特務隊ヴァールハイト隊長とこの艦の艦長を勤める碓シンジ大将だよ」

「それとわたしは国連軍第23特務隊ヴァールハイト副隊長の霧島マナ一佐よ」

二人の自己紹介を聞いたトウジとケンスケが固まった。そしてしばらくの沈黙が続いたあとにシンジは二人に処分を言い渡した。

「それじゃあ、二人の処分について伝えるね。二人の処分は本当なら軍の機密を見たと言うことで極刑なんだけど、黙っててくれるなら処分は無しにすることになったからね」

「ワシは絶対喋らん！」

「僕も喋りません！」

二人は大声で返事をした。

それからシンジは二人を格納庫に連れて行きモビルスーツに乗せ

て家に返した。それから数カ月後に第五使徒ラミエルが来たが
なく撃破出来たらしい。

アスカ来日 その1

この日シンジ、ミサト、レイ、トウジ、ケンスケ、マナの四人はセカンドチルドレンに会いに国連軍太平洋艦隊旗艦空母「オーバー・ザ・レインボー」にMi155-D輸送ヘリで向かっていた。

「オーバー・ザ・レインボー」につくとケンスケはカメラを回し始めた。

「すごい！すごいよ！空母が5、戦艦4の大艦隊だ！ほんと、持つべきものは友達だなあー！」

「ほんとに飽きないよね〜」

「そうそう」

その瞬間この間の一件からケンスケのオタクっぷりに磨きがかかった気がするとその場にいたシンジ、ミサト、レイ、マナ、トウジは考えを走らせていた。そしてそこに白いワンピースを着た赤い髪を持つ女の子が現れた。そう、惣流・アスカ・ラングレーである。

「ハロ〜オ、ミサト！元気してた？」

声をかけられたミサトはそれに返事をして皆に紹介した。

「まあねー。あなたも、背、伸びたんじゃない？」

「うるさいわね。ほかのところもちゃんと女らしくなってるわよ」

「紹介するわ。エヴァンゲリオン式号機専属パイロット、セカンドチルドレン、惣流・アスカ・ラングレーよ。」

アスカは紹介されるとサードチルドレンを探し始めた。

「で、噂のサードチルドレンはどれ？こいつ？」

そういうとトウジを指差した。そしてそれをミサトは否定してシンジを紹介した。

「違うわよ？サードチルドレンは国連軍総司令官碓大将よ」

「やあ、国連軍総司令官兼第23特務隊ヴァールハイト隊長でエヴァンゲリオン初号機専属パイロットの碓シンジ。階級は大将。だけど普通にタメでシンジでいいよ」

「わかったわ、よろしくねシンジ、私もアスカでいいわ」

「ああ、よろしくアスカ」

「葛城一尉、艦橋に向かいます」

「り、了解であります！」

そしてミサトはシンジに連れられ「オーバー・ザ・レインボー」の艦橋に向かった。

オーバー・ザ・レインボー艦橋

オーバー・ザ・レインボーの艦橋に着くとミサトが艦長に式号機引き渡し書類を渡して話し合いを始めた。

「艦長、エヴァ式号機引き渡しの書類にサインをお願いします。」

「なぜかね」

「もしものためにです」

「式号機は第三支部から我が艦隊が受け渡されたのだ！横須賀につくまでは引き渡しはせん！」

艦長のその言葉を聞くとシンジは艦橋に入り艦長に話しかけた。
「艦長」

「い、碇長官！い、一体どういったご用件ですか？」

「式号機をネルフへの引き渡しを許可します。もしもの為だけです。もし海上で使徒が来たら通常兵器では太刀打ち出来ませんからね」

「わ、わかりました受け渡しを致します」

シンジは艦長を言いくるめ、エヴァ式号機引き渡しの書類を書かせると艦橋から立ち去った。しかしシンジは艦橋から出る前に艦長に

言付けをしていた。

「水中レーダーは、横須賀につくまで常に稼働させておくように艦隊全艦に通達してくれ。いいですね？絶対ですよ？」

アスカ来日 その2

艦橋から立ち去った後シンジ達一行はオーバーザレインボーの食堂に来て雑談をしていた。

「それにしても未だに信じられないな」

「ん？何が？」

ケンスケの呟きにシンジは気がつき話をふる。

「いやさ、シンジが国連軍司令部司令でヴァールハイト隊の隊長でマナがヴァールハイトの副隊長だったこと」

「ま！分かりにくかったら分かりにくいだけ襲われなくてすむからいいんだけど」

シンジはケンスケの質問にしっかりと答えた。するとケンスケは横でへえくとでも言いたそうな顔をした。そして今度はミサトが質問をした。

「そ〜いえばシンジ君、どうしたらその年で大将になんて位になれるの？」

「いや、何かわからないけどモビルスーツ開発して大学行って帰ってきて第23特務隊長になって、しばらくしたら国連軍総司令が退役してその後釜役を国連の首脳部が押しつけてきて辞令が下りたから」

それを聞いてケンスケが物凄い剣幕で食い付いて来た。

「ま、マジでか!?!あの今や国連軍全ての基地に在るんじゃないかって言われてるモビルスーツを作った!?!」

「それに国連の首脳部直々の辞令って……」

そしてしばらくするとゼーレ、日本政府、ネルフの三重スパイの加持リョウジ一尉とアスカがやって来て加持がミサトに話しかけた。

「やあ、ミサトお久しぶりだな」

「な、なんであんたがこんなところにいんのよ!」

「アスカの護衛さ」

ミサトの叫びに加持は普通に返した。そして加持はレイの方を向いて挨拶をする。

「初めましてですね。国連軍総司令部司令長官碓シンジ元帥殿?」

「ええ、初めましてですね。日本政府諜報部所属のネルフのスパイさん？」

シンジは笑みを浮かべながらはつきりと言った。すると加持が少しながら動揺の色を見せた。

「な、何を言っているんですか？ 碓大将。自分はネルフドイツ支部所属ですよ？」

加持はあくまでもしらばっくれるつもりのようなのだ。しかし、まわりにはネルフ、国連、陸戦自の面々がいる。

「加持一尉、いいことを教えてあげましょうか。僕は国連軍総司令部司令長官とはいえども委員会の第0席を持っているんですよ。他の委員の方から加持が持ち去った物を取り返し、加持一尉を捕まえよ」と

その言葉に一番に食いついたのはアスカだった。

「何言ってるのよ！ 加持さんはスパイなんかじゃないわ！ 何を根拠にそんな勝手なこと…」

「それが出来るんですよ。私の隊には国連からネルフ以上の特務権限を頂いているからですよ」

「スパイ行為、並びに最高機密の強奪、並びに最高機密の情報漏洩の容疑で加持一尉を拘束し加持一尉の荷物を改めろ！」

「「はっ！」「」」

するとシンジの号令と共に兵士達は加持を捕まえ、牢獄に入れられてからしばらくして加持の荷物を調べるとゼーレから盗まれた物が発見されたのだった。

アスカ来日 その3

加持の荷物の改めが終わり式号機を見に式号機が積んである輸送艦に乗艦するとすぐにアスカが詰め寄ってきた。

「なんで加持さんを逮捕なんかしたのよ!!?」

「加持一尉が日本政府、ネルフ、委員会の三重のスパイ行為、並びに軍の最高機密を盗み出した窃盗罪、そして最高機密の情報流出を意図的にしたという情報漏洩の罪などの犯罪者だったからだよ」

「なっ!だ、だからって……」

アスカはシンジの判断を聞いていいどよむ。

「しかし、加持一尉の罪は軽くはしてあるんだよ?」

「どう言うこと……?」

シンジの罪を軽くしてある発言を聞いたアスカは玲に聞き返した。「普通ならすぐさま銃殺刑なんだねど、今回の事件は日本政府、委員会、国連の不祥事だからね。情報漏洩、並びに最高機密の強奪の件のみは目を瞑る事になってるよ」

「よかった」

シンジの目を瞑るといふ発言にアスカは安堵した。しかし、シンジは追い討ちをかけようとする。

「だけど、加持一尉には数カ月は懲罰房に入ってもらいます」

「なんでよ!あんたさつき目を瞑るって!」

「だ、か、ら!こっちの不祥事だから銃殺刑はあり得ないけど形式上数カ月は塙に入ってもらわないとこっちの面目が立たないの!!」

シンジは 言っつてやった 見たいなドヤ顔を決め込んだ。

「あ、ありがと!シンジ!」

そしてアスカが礼を言ってきた。それをシンジはいいよいよと言った後すぐにシンジの足下の地面が、艦が揺れた。揺れが収まるとシンジは近くの壁に付いていた内線の受話器を取り、艦橋に通信を取る。

「何事ですか!」

通信に応答したのは輸送艦の艦長だった。

『はっ！急に水中レーダーに反応が現れたと思うと我が艦の艦底にぶつかられました！』

「そいつは使徒です！総司令命令で式号機を出す！オーバー・ザ・レインボーのネルフ作戦部長にエヴァのコンセントを出すように伝えた後オーバー・ザ・レインボー以外の艦隊に後退するようにを通信をいれてこの輸送艦も式号機の発進後、後退するんだ！」

『し、しかし』

「いいか？これは総司令命令だからな？」

『り、了解いたしました！』

輸送艦の艦長の返事を聞くとシンジはアスカの方を向いて用件を述べる。

「アスカ、第六使徒がやって来た。式号機を出す」

「わ、わかったわ。シンジはどうするの？」

アスカはシンジに質問をする。

「アスカの式号機に乗せて貰える？」

「いいわよ！ついてきなさい！あたしの予備のプラグスーツを貸してあげる！」

「あ、プラグスーツは持ってきてるから」

「なんでもってんのよ！」

アスカは大声で叫んだ。

「備えあれば憂いなしだからからね」

「知らないわよ！そんな日本語なんて！」

そんな事を言い争ってからシンジとアスカは式号機に乗り込み。輸送艦からオーバー・ザ・レインボーに向かって発進した。

アスカ来日 その4

使徒の襲来を受け、エヴァンゲリオン式号機で出撃した。シンジとアスカは太平洋艦隊旗艦―航空母艦、オーバー・ザ・レインボーに着艦しようとしていた。

「アスカ！ ゆっくりやさしく着艦しろよ！ 甲板が使えなくなる!!」
「わかってるわ!」

シンジがそう注意するとアスカはそう叫び返す。

「こちら式号機の碇です！ 艦長！ 式号機をオーバー・ザ・レインボーに着艦させます!」

シンジはおもむろに無線を開き、オーバー・ザ・レインボーに繋いで叫んだ。

『い、碇長官！ 式号機をですか!?!…カンパンジョウインヲタイヒサセロ!…わ、わかりました! 着艦してください!!』

「後艦長！ 甲板にこいつ用のソケット出しといてくれ！ 通信終わり!」

『わ、わかりました』

「式号機！ 着艦しまゝすツ!!」

アスカがそう叫び、弐号機がオーバー・ザ・レインボーに着艦した。一応、スピードを押さえつつ甲板に降り立つ。しかし、エヴァは50mを超す巨人だ。弐号機が着艦するとオーバー・ザ・レインボー左右に大きく揺れた。しかし、いかに古かろうが腐っても巨艦だ。これごときで沈みはしない、が、飛行甲板は弐号機によって壊されており、発着艦は出来ないだろう。

「よし、ソケット接続完了ー！」

着艦してからアスカはオーバー・ザ・レインボーの甲板に出されたエヴァの充電ソケットを弐号機の背中に接続する。それから左の肩からプログレッシブ・ナイフを装備した。

「さあして、使徒はどこか…キヤア!!」

一瞬だ、弐号機がプログレッシブ・ナイフを装備した瞬間、海中からいきなり使徒が表れ、弐号機にカブリついた。そして瞬く間に弐号機は海に引き込まれた。

「は、放しなさいよ！放せよ!!」

アスカは操縦機を動かし、使徒を叩く。だが、弐号機を使徒が放す様子はない。

「アスカ」

「何よ！」

「コアだ！」

「なんですって！何処にあるのよ！」

アスカは大声で聞いてきた。

「使徒の口の中だよ！」

シンジは引きずり込まれる瞬間、使徒の口の中にあつたコアを見ていたのだ。

「使徒の口イイ!?!」

「そうだ、だから使徒の口をこじ開けてくれ！」

それからシンジは上から落ちてきたプログレッシブ・ナイフを見つけた。そして、それを掴むようにアスカに指示する。

「アスカ！あのプログレッシブ・ナイフを掴んで使徒の口に叩き込ん

「でやれ!!」

「わ、わかったわー!」

そう言っただけでアスカはプログレッツシブ・ナイフを掴むと式号機を挟んでいる隙間からプログレッツシブ・ナイフを使徒の口に入れ、足でコアに叩き込む。すると使徒は動きを止めた。

「入った!」

「蹴って!!」

「やったわー!どんなもんよ!さて、早く上に…ってあれ?」

アスカは式号機を動かそうとするが式号機は微小しか動かない。

「B型装備で無茶しすぎたか…」

シンジはそう呟いた。

「どういうことなのよ!説明しなさいよ!」

アスカはその呟きに反応して叫んできた。

「いや、B型装備で無茶しすぎたからうごかないんだよ。このまま2時間コースかな」

「そ、そんなあゝ!!」

アスカの叫びは式号機のエントリープラグに響いたに過ぎなかった。結局、シンジ達が引き上げられたのはまさに2時間後だった。

アスカ来る！第壺中へ

「なあ、センス。昨日のあの女ってワシらと同じ年なんやろ？この学校に来んのやろか」

ガキエル戦の翌日。学校に着き、朝の用意をしているとトウジがそう聞いてきた。

「うくん…たしかラングレー大尉は大学を飛び級で出てるし…どうなんだろ？」

「はあく!? 大学を飛び級〜!?」

まあ、驚くわな。

「うん、らしいよ？」

「マジか…」

トウジが口を半開きになっている。

「まあ、もしかしたらネルフの意向で日本だから中学校行ってら! ってな感じで言われてたら別だけどね」

「なるほど」「席つけー、出席とるぞー」…ほな後でな」

担任が現れ、席に着けと急かし、トウジや他のクラスメイト達がゾロゾロと自分の席へと向かう。

「えーつと、今日はだな。転校生がいます。惣流さん、入ってきて下さい」

惣流? ってことは…

「ドイツから来ました。惣流・アスカ・ラングレーです。よろしく願いします」

黒板へサラサラサラと名前を書き、その少女は名乗ってきた。

…やっぱりかー!!

「うわああああああつ!!」

「ん? あら、あなた達3人とも同じクラスだったの?」

「あ、ああ。よろしく」(なんやあの外ヅラのよきは…)

そうトウジが返すと机の間の通路を通り、空いていたシンジの横の席に座った。

「かつこいいいよねー彼女」

「マジかわいいーじゃん」

「それにあのスタイル。腰の高さが違うぞ?」

「見て、あの髪。金髪よ。ほら、サラサラ…」

しばらくは回りのクラスメイト達が口々に喋り、ザワついていた。



「あゝゝゝあ!超つつまんないのツ!!」

授業も終わり、ネルフ本部で試験の為にリツコの実験室へ向かう通路でアスカが頭の後ろで手を組みつつ大声を出していた。

「ほんと退屈ね、日本の学校って」 テイドヒク——イ!

「僕に言うなよ。僕は軍属、文部省の官僚じゃないんだから」

「それにあの先生バツカじゃないの?政府の流したウソの情報ほんとして教えてさ」

アスカが言うのは今日の授業であった

「二十世紀最後の年、巨大隕石が南極に衝突し、氷の大陸は一瞬にして溶解。水位は20mも上昇し、異常気象が世界中を襲い、さらに経済恐慌を——」

って奴だ。まあ、聞いてても起こり得ないと感じちやうけど実際の

原因を知ってるとなあ〜

「え？」

「やだ…あんたひよつとして知らないの？セカンド・インパクトのこ
と」

アスカが飽きれ気味にそう小馬鹿にしてきた。

「教えてあげましょーか」

「15年前―人類は最初の「使徒」と呼称する人型の物体を南極で発見したのよ。でも、その調査中に原因不明の大爆発が起きたの。それが本当のセカンド・インパクトの正体よ」

自慢げに言ってるが此方はその先まで知ってるわっ!!

「ああ、知ってるとも。その事故は人為的に引き起こされてるって事ぐらいはね？」

「えっ？えっ？」

「じゃ、先行くね〜」

そう言い、シンジは走ってその場を離脱した。

「人為的につて…」

一人残されたアスカは通路の真ん中でそう呟くのだった。

エヴァ四号機、消滅せず

「碓長官、どうですか？ここは日本のネルフ本部とは違うでしょうか？」
アスカがやって来た二日後、シンジはというとエヴァ四号機のS2機関運用実験が行われるという米国ネルフ第二支部に国連軍総司令として来ていた。

「ええ、こちらは随分機能が重視されていてよいですね」

「それはどうも。…あつ！君！こつちへ」

ネルフ第二支部司令、ルカルド・フォールズ中將に軽く世辞を返すとその時司令塔に来ていた小柄で、輝くような銀髪の少女をフォールズ中將が呼び止めた。

「この娘は？」

「碓司令長官、この少女は今回の四号機試験パイロットのメリア・アマルファイ少尉です」

「よ、四号機試験パイロットを務めます！メリア・アマルファイ少尉です！碓司令長官殿！」

アマルファイ少尉はテンパリながら敬礼をしてきた。それにシンジも答礼する。

「今日の試験運用、期待しているね」

「は、はい！」

アマルファイ少尉に激励の言葉を送る。

「所でアマルファイ少尉、年は幾つなの？」

「ふ、二日前に14歳になりました」

「同じ年なんだ…」

「そうなんだ、僕も14だからシンジでいいよ」

「わ、わかりました。私もメリアでいい、です」

「では碓長官、試験所に向かいましょう」

フォールズ中將にそう言われ、シンジとフォールズ中將は司令塔を後にした。



「碓司令長官、その少女達はどなたで？」

試験所に向かう廊下で不意にフォールズ中將がシンジの後ろにいる。二人の少女の事を聞いてきた。

「ああ、此方は私が引き取った子達です。色々教え込んでありますので今回の私の護衛役ですな」

「碓シエルです」

「碓エルスです」

「おお、碓司令長官の御淑女ですか？お綺麗ですな」

「ありがとうございます。フォールズ中將」

そうしているともう、試験所に着いてしまっていた。

「ここが試験所になります」

フォールズ中將が自身の身分証をパネルにかざす。すると扉がすーと開き、奥の窓から壁に捕まれた銀色の巨人が現れた。



バシユンツ!!

アームに掴まれたエントリープラグがエヴァ四号機に挿入され、四号機のS2機関運用の実験が開始される。

「エントリープラグ固定完了」

「第一接続開始。パルス送信」

「グラフ正常位置」

「リスト1350までクリア」

「初期コンタクト問題なし」

「了解！作業をフェイズ2へ移行！」

「オールナーブリンク問題なし」

「リスト2550までクリア」

「ハーモニクス全て正常位置」

ピーー!!

ここまでは良かった。だが、急に警報のベルが鳴りエヴァ四号機の実験パネルに異常が現れ始めた。

「何があった!!」

フォールズ中將がオペレーターに叫ぶ。

「パルス逆流!!」

ギギギギツ…

エヴァ四号機を固定していた固定具が…

「中枢神経素子に拒絶反応を確認!!」

ギギギギギ…バキヤツ!!

暴走したエヴァ四号機に引きちぎれる。

「コンタクト停止!6番までの回路開け!」

第二支部の技術部主任がそう迅速に指示をする。が、

「信号拒絶つ、だめです!!」

「四号機制御不能!」

四号機は信号を拒絶、顎の拘束具が引きちぎられ四号機は雄叫びを上げた。

グアオオオオー!!

「実験中止!S2機関の接続を切れ!」

カチツ、カチツ、カチツ

「四号機、予備電源に切り替わりました!」

四号機にはS2機関の他にも予備バッテリーを積んでいたのだ。

グワツ!

「完全停止まであと35秒!」

四号機が腕を振り上げ、実験所の指揮所を殴り付ける。

ドカン!パリッ

「フォールズ司令、碇長官、危険です!下がってください!」

バガンツ!

「ワイヤーケージ!特殊ベークラフト急いで!」

その指示により実験所に特殊ベークラフトとワイヤーケージが射出される。

ヴアシュウウウウウ…

「四号機停止まで…5、4、3、2、1、0！四号機活動を停止しました！」

秒読みが入り、それが0になりやっとの事で四号機がダラリと首を垂らし、停止した。

「救護班！パイロットの救出！急げ！！」

その号令が出され、救護班が活動を停止した四号機に向かって走っていた。

第二支部、ラミエル来る

「大丈夫か？メリア」

実験後、シンジはというと先の実験で負傷した四号機試験パイロットのメリアのお見舞いに第二支部内の病棟に来ていた。

「へっ？し、シンジ!?いつつく!!」

「ああ、そのまま楽にしててよ」

シンジに気がついたメリアが敬礼をしようとして立ち上がりかけるがそれを制止させる。

「今回の実験はS2機関と機体の同調がコンマ0.6ズレていたのが原因らしい。君の責任では無いと言っておくよ」

「は、はい」

そう、今回の実験での四号機の暴走の原因はS2機関と機体本体との同調のズレだったようなのだ。

「でだ、君宛の辞令だけどね？」

折り畳まれた紙を広げ、要約しつつ説明する。

「エヴァ四号機試験パイロットメリア・アマルフィ少尉は病棟入院による一週間の観察扱いとし、一週間の間エヴァ四号機試験パイロットの代理には国連軍総司令官、碓シンジが勤める。以上だ」

「し、シンジが乗るんですか!?!」

それが普通の反応だよなあ……ネルフ側とか躊躇なく突っ込まれるんだけど…

「ああ、幸い俺はほとんどの機体に乗れるからな。俺は初号機のパイロットもしてるから大丈夫だよ」

「国連軍の最高責任者をそう易々と使えるものなの…?」

まあ、質問に出てくるわな。

「ああ、その理由は二つだ。一つ目、俺が既にエヴァ初号機のパイロットであり経験があるから。二つ目、この第二支部を含め第一支部にもエヴァの適合者がいないからだ」

「はいっ!?大丈夫ですか!?!」

「明日には四号機の調整が完了するからそれから実験だ。じゃ、お大

事にね〜」

シンジはそう言うのと立ち上がり、メリアの病室を後にした。



『碓長官、実験開始します。よろしいですか?』

四号機——もといS2機関搭載型用に改造されたエントリープラグ、その中にシンジの姿があった。

「開始してください」

『了解しました。エヴァ四号機S2機関運用再実験開始します』

オペレーターはその返事を聞き、通信を切る。今回の実験は四号機とS2機関、パイロットの同調実験でありパイロットの操縦作業は無い。ただ平常にシートに座っていればいいのだ。

数分で四号機とコンタクトしたのが分かった。自身が大きく感じる。初号機に初めて乗った時の感覚に似ている。そのすぐ後、指揮所から通信が入る。

『碓長官、実験は成功です。そちらはどうですか?』

「ああ、特に問題はない。上々だ」

『ヤッター!セイコウシタナ!』

通信の先でオペレーター達の歓喜が聞こえる。と、その瞬間、実験所が赤く点滅し、けたたましい警報が鳴った。

「何があった!!」

シンジは咄嗟に通信機に向け、叫ぶ。

『サンフランシスコ沖より未確認飛行物体が接近中!』

「何!?!」

使徒か?

『第六使徒と思われまます!第二支部に向け進行中とのことです!』

狙撃せよ、シンジ

『サンフランシスコ沖より未確認飛行物体が接近中!』

「何!？」

シンジはそれに驚き叫んだ。第二支部に現れた使徒はいなかった筈なのだ。

『第六使徒と思われます! 第二支部に向け進行中とのことです!』

ラミエルか!!

それを聞きシンジはシエルに渡してあつたアダムを思い出していた。ガキエル戦の後、加治から押収したアダムを委員会はシンジ預かりとさせられていたのだ。理由が…『碇君ならばよかろう』だそうだな。なんかこのセリフに呪われてるか？

『碇長官! 使徒の迎撃をお願いしてよろしいですか?』

フオールズ中將が急に通信にやって来た。

「了解。あ、フオールズ中將! エヴァの陽電子ライフルはあるか!!」

『陽電子ライフル…ポジトロン・ライフルですか? 試作タイプなら何挺かはあつたはずですが…それを使うのですか?』

あつたよ…前の時は陸戦自にしかなかったのに…

「うん、地上にて長距離射撃で攻撃を行います」

『はっ! わかりました』

そう言われ、通信が切れる。初戦からポジトロン・ライフルで撃つてやれば…いけるかな?



『目標はネバダ州上空へ侵入しました。碇司令長官。発進、よろしいですか?』

エヴァ四号機がカタパルトにセットされるとオペレーターがそう

聞いてきた。

「頼みます…グツ…」

返事をするのと体に大量のGがかかり、操縦桿を握る手に自然と力が入っているのが分かった。カタパルトから射出されているのだ。

『目標内部に高エネルギー反応！』

「何だって!？」

無線に向け叫ぶ。

『周円部を加速！収束していきますっ！』

そうした所で四号機が地上に出させる。その瞬間、ラミエルの中心が光っているのが分かり、オペレーターに命令を入れる。

「四号機カタパルトロック解除!!」

『は、はいッ!!』

間に合うかッ!!

カタパルトロックが外された所でシンジは機体を急速に動かし、飛び上がるとバク転して後ろに下がる。その瞬間、四号機のいた場所が突如蒸発、消滅した。ラミエルの加粒子砲が着弾したのだ。

「あつぶな！こちら四号機、ポイントD-3まで後退するぞ！」

『試作ポジットロン・ライフルはポイントD-3に出してあります！』

片手でスイッチを押し、地図を画面に出す。D-3にポジットロン・ライフルを表す緑のランプが一つ、弾薬を表す赤のランプが二つ光っていた。そしてシンジがD-3まで後退すると使徒は第二支部の真上で停止し、地下にある第二支部に向けてATフィールドを使い地面を穿孔し始めていた。

「おいおい…（やつぱりラミエルの狙いはアダムか!）」

「使徒を射撃で撃破する！」

そう言ってシンジはポジットロン・ライフルを手に持ちもう片方に弾薬の入ったカートリッジホルダーを掴む。そしてポジットロン・ライフルの目標を使徒のコアにセットして引き金を引いた。

「当たったか!!」

スコープを押し退け確認に目を凝らす。使徒に当たったという手応えは…あった。だが、それはラミエルの偽のコアだったようですぐ

にお返しの加粒子砲が飛んできた。

「クソッ！突撃するっ！」

そう言うのとシンジはポジトロン・ライフルのカートリッジを交換し、使徒に向けて機体を走らせる。

「ごっごっ！」

使徒が途中加粒子砲を放ってきたがポジトロン・ライフルを当て、中和させてなおも走る。そして使徒まで後200mという所に接近するとまたさらに加粒子砲を放ってきたが今度は空になったポジトロン・ライフル自体を身代わりに肉弾する。

「プログレッシブナイフ!!」

『はいッ!!』

ビルを足場に使徒に飛びかかりながら肩のプログレッシブナイフを取り出し、使徒に投げつけた。

「こんのオー!!これでもくらえッ!!」

そう叫んで使徒に刺さったプログレッシブナイフに蹴りを入れる。するとそれのお陰でコアまで届いた。使徒は急に静かになり、その体を地に落とした。

「よしっ！」

『パターン青消失！やりました!!』

かくして、第二支部での使徒迎撃戦は終了した。



— 帰り —

「シンジ！」

視察を終え、ミネルバに戻るためにセイバーに乗ろうとしていると後ろから声をかけられ、振り替える。

「メリア？」

「ありがとね、シンジ。使徒を倒してくれて」

「そう言いメリアが近づいてくる。」

「これが仕事だからね」

「まあ、とにかく！―これはお礼だよ！また会おうね！」

その去り際、メリアが振り返りシンジの頬にキスをしてきた。

「―因みに私のファーストだからね？」

「!？」

あまりの爆弾にシンジは声にならずに固まった。後ろからのイタ
イ視線と一緒に。

「おとーさん？」

「父さん？」

…娘（使徒）達からの言葉がイタイ…

「さ、さて！ミネルバに帰るか！」

「…」

「あはは…はあ…」

無言の圧力に負け、セイバーのコックピットで深くため息をつくシ
ンジであった。

心の底

「葛城一尉、お久しぶりです」

ネルフ本部に帰還した翌日、シンジの姿は戦術作戦部作戦局第一課にあつた。長つたらしい名前の部署だが、ミサトが作戦部長を勤める戦術部隊らしい。

「そうね。で、どうだった？第二支部は」

デスクに座っているミサトがそう聞き返してきた。

「分かってるでしょ？最悪でしたよ。使徒が来たし」

「聞いてるわ。第六使徒撃退、お疲れ様」

軽く嫌味を込めて言う。

「そういえばあの二人はどうです？仲良く出来てました？」

「あの二人…って。ああ、アスカとレイのこと？はあ…」

アスカとレイの状態を聞くとミサトは何かを思い出し、ため息をつく。

「何かあつたんですか？」

「え、ええ。シンジ君が第二支部に行っていない間になんかアスカとレイが口喧嘩したみたいでいがみ合ってるのよ…」

あー…アスカをレイが軽くあしらつて口喧嘩つてのが浮かんてくる…

「レイがアスカを無視してそれにアスカが突っ掛かって行ったらいつものレイの性格で…本当嫌になっちゃうわ…ハハハ…」

段々と声が小さくなり不気味な笑いが見えてきた所でシンジはヤバイと察し、話題を変えようとする。

「か、葛城一尉、そういえば四号機は第二支部所属なのは知ってるんですけど四号機があるなら参号機はどこ所属なんですか？」アリアアシヤチクノメダ…

「ハハハ…んう？え？参号機？うーんと、たしか…参号機は今は北米ネルフ第一支部にあつたはずね」

やっぱりあつちにあつたんだ。

「ただパイロットがいないから置物もいところらしいわ」

「なんじやそりや…ま、まあ、あつちには四号機が戦線配備されてるからいいのか？」

「かもしれないわ。あつと…あつた。シンジ君、リツコがシンクロテストをしたいから顔を出してと言っていたの。たぶん第一実験室にいると思うから」

ミサトは急に思い出したかの用にシンジにリツコが呼んでいたと教えた。…絶対忘れてたな

「分かりました。それじゃあ失礼します」

「ええ、それじゃあね」

そう言いシンジはミサトがいる課の部屋を後にし、リツコのいる第一実験室へ向かっていった。

— 第一実験室 —

「お久しぶりです。赤城博士」

第一実験室に入り、リツコを見つけるとシンジは声をかけた。

「あら、久しぶりね。シンジ君」

「ところで赤城博士。アスカとレイがいがみ合ってるって聞いたんですけど…」

「ミサトに聞いたのね？」

「はい。それで赤城博士、用事って何だったんです？」

ミサトに言われていたリツコからの用事の内容を聞く。

「ああ、シンジ君にはレイとアスカの仲介を頼みたかったのよ」

「アスカとレイを仲介って」

「ウー!!ウー!!」

「な、何事です!？」

急に警報が鳴り、放送が流れる。

『警備巡航中の護衛艦「はるな」より打電！沖合い20海里地点にてパ

ターン青を確認せり！使徒と確認！エヴァパイロットはケージへ』

「はるな」からって事は……ッ！まさか！

「それじゃあ、急ぎますッ！……ッてあ、ガッ!」ゴツーン！

「し、シンジ君!?!大丈夫!?!シンジ君!!」

駆け足でケージへ向かって走り出したシンジだったが、床をはつていたパイプに足を引っ掛け、転んで頭を机の角に打ち付け目を回してしまった。

双子の使徒、来る

「なあ〜んですって!? シンジ君が頭打ち付けて目を回したから戦闘不能!?」

発令所にミサトの甲高い怒鳴り声…もとい叫び声? が木霊していた。なんでこう、直ぐ叫ぶんだろ…この人…

『ええ、幸い式号機、レイも初号機で出撃できるわ。…ただアスカとレイの仲が悪いのが少し問題ね』

「そんな事言っちゃられないわね…仕方ないわね、式号機、初号機はレイに書き換えて出撃用意!!アスカとレイは!」

リッコの提案しかなく式号機と初号機の出撃用意をさせ、シゲルにアスカとレイの場所を聞いた。

「両パイロット、エントリープラグ内で待機しています」

「アスカ、レイ!シンジ君が出られない以上貴女達が頼りよ」

パイロット兩名にそう言うくとアスカが司令塔に通信を開いてきた。

『まっかせなさい!この「私が」倒してあげるわよ!』

「レイとも連携を…って切りおった…」

レイの名前をミサトが言いかけるがそれに気がついたアスカがかさず通信を切ってしまった。

「葛城一尉!初号機、式号機共に発進準備できました!」

「わかったわ。エヴァンゲリオン、発進!!」

シゲルの発進準備完了の報と共にミサトは高々にそう言う。するとエヴァの射出機のロックが外され、地上の射出口に向け高速で上昇していく。



「さあ〜て、私から行くわ!援護しなさいよ!ファースト!」

『待って…式号機の人』

地上に出た途端、アスカがプロシレッシップナイフを装備して使徒に

向けて突撃する。レイが使徒の怪しさから静止するもレイの静止を聞かないアスカの式号機が敵のコアにプログレッシブナイフを突き立てた。

「ぬあああーっ！」

「どう、サードチルドレン！戦いは、常に無駄なく美しくよ！」

「…何かおかしい、下がって」

そう思ったの束の間、使徒のコアがギョルンと回り、使徒が二体に分裂した。アスカとレイに動揺が走った。

「なーんですって!?!」

『なあってインチキ!』

その一瞬の隙に使徒は式号機を蹴り飛ばしアンビリカルケーブルをも引き千切る。

「キヤアアー!!」

蹴り飛ばされた式号機は初号機にぶつかる。初号機一機では不意に蹴り飛ばされた式号機を支えられるはずもなく式号機共々吹き飛ばされる。

『アスカ、レイ!!』

「エヴァ式号機、左腕損傷！アンビリカルケーブル断線!!活動限界まで、あと5分！」

司令塔にマヤの声が響く。それが終わる前にミサトは式号機の神経接続をカットさせる。

「式号機の神経接続を30%カット!!」

「…碇司令、これ以上の追撃と初号機一機での作戦遂行は避けるべきです。作戦中止を進言します」

重々しい口を開いたミサトがゲンドウにそう問い掛ける。

「…現時刻を持って作戦中止。直ちに国連第2方面軍に指揮権限を譲渡、N2地雷を投下させろ」

ゲンドウが指示を出し、国連第2方面軍へ指揮権限譲渡するのだった。